贈る言葉

贈る言葉

柴田　翔

新潮社版

贈る言葉（おくることば）
一九六六年一〇月一〇日　発行
一九七八年一二月五日　三六刷
著者　柴田翔（しばた しょう）
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(03)二六六—五一一一
　　編集部(03)二六六—五四一一
振替東京四—八〇八
印刷　二光印刷
製本　神田加藤製本
定価七五〇円

© 1966 Shô Shibata
Printed in Japan.

乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

柴田翔中編集・目次

十年の後 …… 五
贈る言葉 …… 二三五
あとがき 219

裝幀　高木雅章

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

贈る言葉

十年の後

第一章

1

久し振りのクラス会は、夕方には終った。会場であった銀座の喫茶店から外へ出ると、休日の家族連れの客たちは漸くネオンの光が活気を帯びて輝き出している冬の暮色の中を、足早に帰りを急いでいた。野中見司は、その雑踏に一瞬立ちすくんだ。

赤い、特売の景品の風船が、喫茶店の入口に立つ見司の顔にぶつかった。見ると、すぐ前を三歳位のオーバーに着ぶくれた女の子が、父親の腕に抱かれ、大事そうに風船を握りしめて通り過ぎて行った。女の子は、抱かれたまま、首を後に廻すと、呆然と立ち止っている彼の顔を、不思議そうに見つめながら、遠ざかって行った。

今、野中見司の前を流れて行くのは、仕合せな人々の群れであった。たとえ、充ち足りていなくとも、そして、彼らの顔は、今日一日の買物と疲れと埃で、黒ずみ生気を失っているとしても、それは人生の何であるかを知り、人生において自分の求めるものが何であるかを知っている人々の群れであった。

喫茶店の扉がまた開くと、クラス会に出ていた他の連中も、がやがやとしゃべりながら、一斉に出てきた。彼らは、そのまま、歩道に固まって立ち、三々五々、話を続けて、暫くの間、駅に向う人々の流れを乱したが、しかし、すぐ、互に別れを告げ、思い思いに、その流れの中に、身を没して行った。

野中見司は、身体をめぐらせて、まだそこに残っていた鏡修一の顔を見た。修一も、何とはなしに、見司の顔を見た。そして二人は、別に何も言わずに、そのまま、流れる雑踏の間をぬって、尾張町の方へ歩き出した。

以前、大学の頃、あるいは大学を出たばかりの頃、まだ皆が今ほど帰りを急がなかった頃から、高校関係の集まりのあとは、いつもそうだった。はじめは、五人、六人と固まって、飲んだり、しゃべったりしていても、それが次第に一人帰ったり、二手に別れたりして、最後に一緒に残るのは、いつも結局、修一と見司だった。就職して、夜の時間をそう無制限に延長できなくなってからも、二、三十分だけでも、二人だけで顔を見合わせ、「どうだい」「まあ、まあ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

といったような無意味な会話をとり交わすのが習慣であった。何かの都合で、それができなかった時は、見司には、何か、いつも物足りない気持が残った。

「おい、何だい、あれ」

修一がふり返りながら、いつもの癖で、少しつっかかるように言った。見ると、丁度、二人がその前を通り過ぎた婦人洋品店から、ふんわりとはおったオーバーの下に明るい色のスーツを鮮やかに着こなして、舞台のためのメークアップのように濃い化粧をした若い女が、少し年下の、わずかに口紅を引いた他は全く無造作な身なりの、スラックスをはいた女と一緒に出てきたところだった。

「女優か？」

「だろうね」

見司は短く答えた。

「だけど、一緒にいる女、あれ、何だい？」

「世話係さ」

「そりゃ、世話係だって、もう少しましな恰好……」

「附き人って、不思議と、みんな、ああなんだ」

編集者という職業柄、そうしたものを、いつも見なれていた時期もあった見司は、さして珍

しくもなくその二人連れを見やると、そう簡単に答えて、また歩き出そうとした。
が、修一は立ち止ったまま、まだ二人を見送っていた。
「どうしたんだ」
「あまり二人ともが、役柄を心得すぎているからさ。ああ言うのは俺は厭だな」
「あれは一種の制服さ、両方とも。誰だって、制服が欲しいんだ」
「制服なんて、いくらも、まわりから着せてくれる、自分から着なくったって」
修一は、何か苛立ったように、そう言ったが、見司はその修一を少し眺めただけで、言葉では答えずに歩き出した。
二人が、みゆき通りを横切ろうとした時、東から冷たい風が吹き抜けて行った。昼間、よい天気だっただけに、急にあたりが冷えてきたようだった。前を歩いている三人連れのBGの一人がオーバーのえりを立てたのにつられて、見司も思わず肩をすぼめた。
「ひどく寒くなってきたな——」
見司の様子を見て、修一が言った。
「ああ」
答えながら、見司は立ち止って、あたりを見まわした。
「さて、どこにするか。六年間、東京を留守にしたお陰で、この辺のことは、すっかり判らな

くなった」

「俺だって、こんな所、滅多に来るもんか」

そう答えて、修一も、あたりを見まわした。

「そうだな。この寒さだ。ふぐのちりでも食うか。もっとも、関西で暮してきた奴に、東京で魚でもないとすれば……まあ、しゃぶしゃぶにでもするか」

見司は、ふと振り返って、修一の顔を見た。彼は、修一の言葉に、わずかに躊躇の影を感じたのだった。見司はまだ独身だが、修一は、もう二年ほど前に結婚していた。

「夕食は帰って食わないでいいのか」

見司はたずねた。

が、修一はすぐ打ち消した。

「いや、かまわないんだ。帰らないかも知れないと言ってある」

そして、不機嫌そうな顔で、そっぽをむいて、つけ加えた。

「久し振りに野中が東京に帰ってきたのだから、本当は一度、家にきてもらうといいんだが、実は、あいつ、今、つわりなんだ」

へえー、こいつも子供を——。ちょっと驚きに似た感情が、見司の心にゆっくりと拡がっていった。

「そうか。そりゃ知らなかった。おめでとう」
一応はそう順当な挨拶を述べた見司だったが、その間にも、元々は何ということはないはずの修一の言葉は、意外に重いうねりとなって、彼の心を大きくゆさぶり始めていた。
見司は、やがて間もなく父親になるという修一を眺め、まだ結婚さえしていない我が身を思った。そうすると、自分の足元の不確かさ、そこに大きな穴がぽっかりと口を開けていることを、今更のように思い知らされる感じであった。
考えてみると、見司が修一と知り合ったのは、十五歳、高校一年の時だから、もう十五年以上前のことになる。高校に入って、はじめての時間、まだ席が決まっていず、みな、うしろの方で、がやがやと立っていた時だった。やせた少年が一人、さっさと前の方へ進んで行って、最前列の、左の窓際の席に坐ってしまった。そして、後で席に坐ることをためらっている新しい同級生たちのことなど、全く無関心げに、新緑の窓の外へ眼を投げていた。その少年が修一だった。
その日、席は、みなが自分の好きに坐った通りのそのままに決まったから、修一は三年の間、その最前列の席に、いつも半ば窓の外へ視線を向けているような、肩を怒らせた姿勢で坐っていた。
修一は、その頃から、頑固だった。学校の成績は、トップグループだったが、自分の思うことは決して曲げず、言いたいことは、何でも無愛想に言ってしまうので、教師や仲間たちの受

けは、悪かった。

高校生の見司は、そうした修一から、いつも自分のための無言の支えを見つけていた。見司は、自分のまわりの変に世間風に大人ぶってみせる同級生たちに、内心激しい反撥を感じていながら、それを口に出すことができず、暗く陰うつな表情をして校内を歩きまわっていたが、修一の遠慮のない発言を聞く度に、そうなんだ、俺だって俺の言いたいことを言っていいんだと、自分に語りかけ励ますことができた。見司がその後の人生で、たとえ、いつも少し暗い表情であったにせよ、ともかく自分のしたい生き方だけをして押し通してきたとすれば、そして、そういう自分の生き方にある確かさを感じてこられたとすれば、それは高校生の時知り合った修一という友人のお陰だということを、見司はいつも心に意識してきた。

元より二人は全然違うタイプの人間であった。見司は修一とつき合っていて、時々不思議に思うことさえあった。見司は自分の心を決して曲げまいとするそうした不遜さのために、いつも、世間と折り合いをつけることができず、世間の認めるコースから、ともすれば足を踏みはずしてしまっていた。ところが、それに対して修一は、自己の不遜さを見司以上にあらわに世間に見せつけながら、同時にそういう不遜な自分、決して折り合おうとしない自分を、そのまま世間に認めさせてしまえるのだった。そして、自分に必要なものは決して逃がすことがなかった。

高校の三年が終り、見司が自分の心になじむことのない受験勉強にどうしても身を入れる気

になれず、自分の名の出ていない合格者発表を当然のことと思いながらも重い気持で眺め、そして、予備校の満員のベンチに毎日を過ごすようになった時、修一は、さして嬉しそうな顔もせず、大学に通いはじめていた。更に大学を出たあと、見司が、あまりパッとしない中小ジャーナリズムの世界で次々と転職し、今度、人の世話で漸くやや安定した職場を見つけて東京に戻ってきたのに引きかえ、修一は最初から日本でまず三位とは落ちないM銀行に就職し、今は同期のトップを切って本店の課長補佐になってしまっている。

それも、普通の人間なら、そうした出世コースを歩いて行くうちには随分と妥協の術を覚えるものだろう。学生の時代は生意気で自分を通し、また今でも、友人や目下のものにはぐっと姿勢を高くしてみせる男でも、自分の地位を左右できる相手には思いがけず丁重になる様子を、見司はしばしば見てきた。いや、そんなコースとは程遠い見司自身さえも、お世辞こそ言わなかったにせよ、言いたいことの十分の一も口に出さずに過ごしてきた何年かだった。だが、修一一人は、誰相手にも愛想笑い一つせずに、言いたいことを言って済ませてきてしまったと、見司には見えた。彼の場合エリートコースを歩いてきたことは、その人柄の中にある犀の角のようなものを、必ずしもすり減らさなかっただけではなく、むしろ、研ぐような役割をさえ果してきたようだと、見司は思った。

例えばの話が、二年前、まだ係長であった修一が同じ課で働いていた基子と結婚した時であ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com